

# 子どもたちに贈る布絵本の製作を通してグローバルな資質の育成をめざす「技術・家庭」の授業開発

浦上千歳 ・ 柴 静子\*

**要約：**本研究では、ESD（持続可能な開発のための教育）を「技術・家庭」の授業で実践するため「ものづくり」と「発展途上国理解」とを繋ぐ効果的な学習を構築することを目的とした。そのために、文化環境に恵まれていない地域で生活しているモン族の子どもに贈る布絵本を製作することを目標として、かかわりを尊重する子どもの育成を目指し、さらには持続可能な開発のための人材（グローバルな人材）の育成にもつなげることを目途に実践した。その結果、中学2年生の授業実践後のアンケート調査の結果から、かかわりを尊重する子どもの育成に寄与することが明らかとなった。また、家庭科におけるESDの授業パターンを2つ提案する中で、「相手を意識し、活用させるものづくり」を設定することによって、効果的な学習を構築できた。

**キーワード：**ESD, モン族, グローバル, つながり, 布絵本の製作, ブックスタート

## I. 問題の所在

筆者はこれまで、生活文化力を培う家庭科授業づくりのあり方について研究してきた（浦上ほか, 2012・2013）。そこで、伝統的・文化的な要素を組み入れた授業は、生徒の生活文化力を形成する一助となることを明らかにしてきた。この研究における染色文化を扱う学習を通して、時間的つながりの縦軸と空間的つながりの横軸の2つの視点から、藍染めを授業に取り入れる意義が明らかになった。

作品製作についてはこれまで、平成24年度に自分のお弁当袋、平成25年度にモン族の子どもへのぬりえ絵本とそれを入れるバッグを製作した。ときに生徒たちは意欲的に製作した。しかし、他者に役立ち、喜んでいただく視点を生徒に示した昨年度の方がより意欲的であったように感じた。

半澤（2011）は、平成24年度実施となる指導要領において、他教科の多くの授業時数が増加している中、技術・家庭科における授業時数の増加はないという本教科の厳しい現状に早くから課題意識をもち、家庭科における学びが持続可能な社会の構築という観点から期待を寄せられる点を指摘している。

また、文部科学省の日本ユネスコ国内委員会（2013）でもESDを取り上げ、その実施において、次の二つの観点を示している。「①人格の発達や、自律心、判断力、

責任感など人間性を育むこと」、 「②他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、関わり、つながりを尊重できる個人を育むこと」である。特に②に関しては、家庭科教育がこれまで目指してきたことである。

そこでESDを基盤とした家庭科の授業のあり方を追究するため、本研究においては、作品製作のゴール設定を、完成ではなく活用、すなわち、何かに、誰かに役立つところに設定した。このことによって、かかわりを尊重する子どもの育成ができ、さらには持続可能な開発のための人材（グローバルな人材）の育成にもつながると考えた。

## II. 研究の目的と方法

本研究の目的は、日本人の自国の伝統や文化を誇りにし、次世代につなぐ思いにつながる「ものづくり」を中心に据えた授業を開発することである。また、このことにより、人とかかわりを意識し、よりよい生活を実践しようとする中学校家庭科授業のあり方を明らかにする。

具体的方法としては、布を共通の題材として扱い、「衣生活と自立」領域と「家族・家庭と子どもの成長」領域との関連を図った授業を設計した。前者に関しては、「①日本の衣生活を支えてきた布の歴史」、 「②布を媒介と

\* 広島大学大学院教育学研究科

した日本と世界の関係」，そして後者に関しては，「③布絵本を製作して贈る取り組み」を計画した。なお，③の学習については，贈る相手を日本の子どもたちやモン族の子どもたちにわけ，相手の違いによる学習の効果を把握する。そして，アンケート調査の結果を分析することで，学習の効果を明らかにする。

### Ⅲ. 授業実践

#### 1 対象生徒

本研究の対象は，広島大学附属東雲中学校2年生の2クラス（各クラス男子20名，女子20名），計80名である。2クラスをそれぞれAとBの2グループに分け，1，2組のAグループをA群，1，2組のBグループをB群とした。

A群：生徒数40名（男子20名，女子20名）

B群：生徒数40名（男子20名，女子20名）

2014年6月19日（木）に行われた筆記テストを事前調査として，両群の間で家庭科の知識の理解および工夫・表現について差があるかどうかについて，SPSS19.0を用いて分析した。次に，各群の筆記テストの結果を表1，表2に示す。

表1 筆記テスト（知識の理解）の結果

	人数	平均値の		
		平均値	標準偏差	標準誤差
A群	40	30.05	7.36	1.16
B群	40	32.85	6.69	1.06

表2 筆記テスト（工夫・表現）の結果

	人数	平均値の		
		平均値	標準偏差	標準誤差
A群	40	1.80	1.27	0.20
B群	40	2.28	1.28	0.20

A群とB群の間に差があるかどうか，t検定を行った結果，「知識の理解」と「工夫・表現」のどちらにも有意差は見られなかった（「知識の理解」 $t=-1.781$ ， $df=78$ ，「工夫・表現」 $t=-1.669$ ， $df=78$ ）。したがって，A群とB群の間で，家庭科の「知識の理解」および「工夫・表現」には差がないと判断した。

#### 2 指導計画（全8時間：2014年9月～2015年1月）

- （第1次）これまで私たちは何を着てきたか  
.....1時間
- （第2次）布は世界をつなぐ .....1時間
- （第3次）子どもたちを知ろう .....1時間
- （第4次）絵本で私たちの思いを伝えよう！（製作）  
.....3時間
- （第5次）布の絵本は世界の子どもたちの心をつなぐ  
.....2時間

#### 3 授業実践の概略

##### （1）第1次 これまで私たちは何を着てきたか

第1次は，天然繊維と化学繊維である。天然繊維は，5種類（麻・綿・絹・絹・デニム）の布見本を各グループに準備し，その特徴とどんな製品に利用されているかを考えさせた。また，化学繊維は，着用している衣服としての歴史はまだ浅いことに触れ，紀元前から天然繊維を身に付けてきた日本の衣服の歴史を振り返り，布の特徴と関連づけた授業を実施した（柴，2013）。ここでは，日常生活のあらゆる場面で自分たちが布とかかわっていることを改めて確認させることもねらった。

##### （2）第2次 布は世界をつなぐ

第2次は，日本の布の歴史の中で，長く庶民に愛された藍染めを扱った。藍染めが日本だけの文化ではなく，世界中で活用されてきたことを紹介し，その一例としてモン族を取りあげた。モン族の布作りや藍染め，衣服製作の様子を映像で紹介することで，かつての私たちの祖先の生活も想起させるようにした（注1）。また，日本の絹，小紋，インドの更紗，イギリスのリバティの柄を比較させて，それぞれの国で発展してきた布に関わる文化が，その交流によりお互いに影響していることを発見できるよう指導した。

##### （3）第3次 子どもたちを知ろう

第3次は，絵本とかかわる子どもたちについて考え，絵本と子どもたちの関係について知ること为目标にした。

##### [Aグループ]

北海道恵庭市で取り組んでいる「ブックスタート」をビデオ映像で紹介して，絵本のもつ方について考えさせ

た(注2)。ブックスタートとは、市区町村自治体が行う0歳児健診などの機会に、絵本をプレゼントし、親子で絵本を楽しむ体験をする活動である。1992年に英国で始まり、2001年には日本でも活動が始まった。広島県でも現在、10の市町村がこの活動に取り組んでいる。この映像資料を紹介することで、子どもたちに与える影響など、おもちゃの中でもとりわけ絵本のもつ力に気づかせたいと考えた。次に、紙製の絵本と布製の絵本を比較させ、柔らかい手触りや安全性など、布絵本のよさに気づかせて、製作に入る前段階とした。

[Bグループ]

発展途上国の子どもたちとしてモン族を取りあげ、写真(注3)や映像から日本の子どもたちと比較させて、その違いと共通点を出させた。これらの資料は、自分たちの先輩が製作した絵本がモン族の子どもたちに寄贈され読み聞かせされている写真(注4)、昨年度の保育実習で、日本の子どもたちに、先輩たちが自作の絵本を読み聞かせしている写真や映像を使用した。さらにラオスのモン族の子どもたちのために図書館を作り、絵本の読み聞かせをしている安井氏の活動を描いた映像(注5)を視聴させ、絵本の力について考えさせた。その上で、モン族のこどもたちに私たちができることを考えさせ、絵本の製作につなげた。また、Aグループと同様に紙製の絵本と布製の絵本の比較を行い、布絵本の製作への前段階とした。

(4) 第4次 絵本で私たちの思いを伝えよう!

第4次では、Aグループの生徒は、対象児を日本の子どもたちとし、Bグループでは対象児をモン族の子どもたちとして、布絵本の製作に取り組んだ。製作する絵本は4人で1冊とし、グループ作業とした。まず、布絵本を通して、子どもたちに何を伝えたいかテーマを決めさせて、そのテーマにそった4ページ構成の内容を決めさせた。その後、1人1ページずつ担当して製作させた。表3は、各班が考えた布絵本のテーマである。

絵本製作においては、表4のような条件を支持した。また、条件により使用させる材料も一部変えた。両グループ共通で準備した材料は、生徒が自分のイメージにより近い作品にできるように配慮した。個人で製作したページを本に縫い合わせる作業は、班内で担当者を決めて、放課後の時間でミシン縫いさせた。

表3 布絵本のテーマ

[Aグループ]	[Bグループ]
おぼえてるかな	カエルの成長
けんかをしないこと	1日-自然の中で暮らす楽しさ-
希望~おおきなあれ!!~	雪(2グループ)
読む楽しさ(数えてみよう)	日本の四季(2グループ)
野菜大好き	世界の様子を伝える
数字	夢と希望
日本のお金について	日本の食べ物
クリスマスの楽しさ	日本の文化
正月	早く寝ないといけない!
日本の四季	ということ

表4 製作における条件と材料・用具

	Aグループ	Bグループ
条件	・子どもたちに絵本の力を与えられるものにする(共通)	
	・布の学習で学んだいろいろな布を取り入れること	・モン族の文化を盛り込むこと
使用する材料	中綿・マジックテープ・ビーズ・フェルト(共通)	
	綿・麻・絹・緋・デニム・更紗・リバティ、日本の古布(ちりめんなど)	モン族に伝わる絵や模様のコピー・モン族の民族衣装に使われる刺しゅうの入った藍染めの布・日常の挨拶のモン語集



図1 Bグループの生徒が製作した布絵本

#### (5) 第5次 布の絵本は世界の子どもの心をつなぐ

第5次では、それぞれが製作した布絵本を交流することで、自分たちの思いを子どもたちに伝えることを疑似体験させ、思いをどれだけ届けることができたかを振り返らせて、まとめの授業とした。交流の準備として、各班に、絵本に込めた思いのまとめと、本を読み聞かせする際のシナリオを作らせ、読み聞かせの練習をさせた。交流は、班員から1人他の班に移動し、そこで他の班の班員3人を相手に読み聞かせをするようにして、これを4回繰り返した。その際、読み聞かせ役の人は先生役になり、聞く方は幼児役となる。特に、Bグループでは、モン族の子どもたちを対象児として設定して製作させたので、幼児役の生徒にモン族の子どもとして演じるように指示した。また、幼児役の生徒には、読み聞かせの後に付箋を使用して感想を書かせた。感想から、理解度と感情の変化が先生役にフィードバックされるように、わかったことを書く付箋と、感じたことを書く付箋の2種類に分けて書かせた。また、生徒が感想を書きやすいように書き方の例も示した。最後に、幼児役からの感想を読み解くことで、自分たちの布絵本にこめた思いが伝わったかどうかを考えさせた。

### IV. 結果と考察

#### 1 日本の文化と絵本の力を学ぶ効果

表3からわかるように、A・Bのどちらのグループも日本を意識したテーマで絵本を製作した。「絵本の力」への意識は、両グループとも強かったが、特にBグループでは表5に見られるように、この力をより強く意識していたようである。モン族の子どもたちについて学ぶ中で、日本の子どもたちに比べて、厳しい環境で育っているにもかかわらず、子どもたち自身の表情や活動などの様子は、日本の子どもたちと大きく変わらないことに気づき、希望や夢、楽しみなどを伝えたいという思いを絵本の中に盛り込んでいた。

表5 Bグループの授業で生徒から出された絵本の力

- |            |             |
|------------|-------------|
| ・楽しさを与える   | ・知恵を与える     |
| ・勇気を与える    | ・いろいろな世界の想像 |
| ・知識を与える    | ・文学の学習になる   |
| ・笑顔を生む     | ・国や文化をこえて共通 |
| ・子どもに必要なもの |             |

また表6は、Bグループの1つの班が製作した絵本「カエルの成長」のテーマ設定の趣旨と絵本を読み聞かせた際に他班で幼児役をした生徒の感想である。製作者がモン族の子どもに贈る絵本として思いを込めたこと、そして幼児役の生徒がその思いを素直に受け止めたことがうかがえる。他の絵本のテーマ設定と読み聞かせの感想も同様のものが多かった。

表6 絵本のテーマ「カエルの成長」における感想例

＜テーマ設定の趣旨＞

テーマ：「カエルの成長」

テーマに込めた思い：最初は小さな卵だったけど、すくすく形を変えて成長し、最後には立派なカエルになるというカエルの成長をテーマに作りました。この絵本に出てくるカエルの成長を通して、生きる喜びを与えられるようにと願いを込めて製作に取り組みました。

＜幼児役の生徒が感じたこと＞

- ・少しずつでも成長することが大事で、ほっこりした気持ちになった。
- ・大きくなったエルちゃんを見てあたたかい気持ちになった。
- ・カエルも楽しく過ごしてるなあ。
- ・生命の誕生ってすばらしいなあ。
- ・自然界は残酷だなあ。
- ・エルちゃんが必死に生きていることがわかった。
- ・よかったねと思えた。
- ・一生懸命に生きることは大切だと思った。
- ・エルちゃんの子どもの大きくなってくればよいなあ。

#### 2 布絵本の製作方法・手順による効果

これまで、過去に何度も絵本作りに取り組ませてきたが、製作活動をさせる際にいつも課題となっていたことは、絵本のストーリー作りであった。しかし、今回のように、製作の授業をする際には、完成ありきとするのではなく、送りたい相手を意識した展開で製作に入ること、その完成度が非常に高まることが明らかになった。

(1) 製作方法による効果

- ① 相手を意識したテーマを設定する。
- ② おおよそのストーリーを考えて絵本製作に入る。
- ③ 製作された絵本に沿ってストーリーを確定する。

上記の手順により、これまでうまくいかなかった物語

作り（ストーリー作り）を無理なく完成させることができた。

### (2) 絵本の構成による効果

絵本には文章を入れず、絵だけの展開としたことで、かえって生徒の想像力と工夫を生み出すよい結果を得た。文章がないことで、絵が単純なものとなるため、絵を描くことが苦手な生徒も、苦手を意識することなく取り組み組めた。

また、文章がないことで、読み聞かせの際、同じイメージを持ちながらも、それぞれの生徒が個性を生かして相手に伝える工夫をすることができた。同じ絵本を使用しても、読み手によってその伝え方は様々で、相手を見ながら、話し方・声・表情・動作などを考えることができていた。

### (3) 布絵本にした効果

布は、紙と比べて、立体感を表現しやすいので、フェルトの下に綿を入れたり、ビーズを縫い付けるなど、生徒の思いを多様な方法で表現することができていた。

## 3 製作の目標設定及び対象者の違いによる効果

### (1) 調査結果

一連の授業の事前と事後で、調査を2回行った。調査1(表7)では、大問Iとして、豊かな衣生活のために必要だと生徒が考えていることに変化が見られるかどうかと日本の衣文化に関する知識の理解を知るための質問を行った。大問IIは、ESDに関わる質問内容とした。また、事後には、製作に対する意欲や工夫が深まっているか知るために、調査2(表8)を行った。

生徒がアンケートに回答した値をデータとして取り扱い、事前アンケートから事後アンケートの伸びを、統計的手法で平均値の差による検定(エクセル統計2012)をすることによって、以下の表9、表10、表11のような結果が得られた。

表7 アンケート(授業前後に実施)

I あてはまると思う番号を選びなさい。		
	① まったく関係ない ② あまり関係ない ③ どちらでもない ④ ややそう思う ⑤ とてもそう思う	
1	私達が豊かな衣生活を送るために、服の選択や手入れに関する理解は必要である	① ② ③ ④ ⑤
2	私達が豊かな衣生活を送るために、着用に關しての理解は必要である	① ② ③ ④ ⑤
3	私達が豊かな衣生活を送るために、服の材料に関する理解は必要である	① ② ③ ④ ⑤
4	私達が豊かな衣生活を送るために、服の文化に関する理解は必要である	① ② ③ ④ ⑤
5	日本の衣文化である染め(柄なども含む)に關して理解している	① ② ③ ④ ⑤
6	日本の衣文化であるしゅりのすばらしさに關して理解している	① ② ③ ④ ⑤
7	日本の衣服の歴史に關して理解している	① ② ③ ④ ⑤
8	日本の民族衣装であるものに關して理解している	① ② ③ ④ ⑤
II あてはまると思う番号を選びなさい。また、何を学んだことで、生活とのかかわりを意識したか下の空欄に書きなさい。		
	① まったく関係ない ② あまり関係ない ③ どちらでもない ④ ややそう思う ⑤ とてもそう思う	
1	家庭科の授業を通して、生活とのつながり(関わり)を意識できるようになった	① ② ③ ④ ⑤
2	家庭科の授業を通して、社会とのつながり(関わり)を意識できるようになった	① ② ③ ④ ⑤
3	家庭科の授業を通して、人とのつながり(関わり)を意識できるようになった	① ② ③ ④ ⑤
4	家庭科の授業を通して、環境とのつながり(関わり)を意識できるようになった	① ② ③ ④ ⑤

表8 事後アンケート(製作に対する意欲や工夫)

I あてはまると思う番号を選びなさい。		
	① 全く関係ない ② あまり関係ない ③ どちらでもない ④ ややそう思う ⑤ とてもそう思う	
1	意欲的に製作の計画を立てることができた	① ② ③ ④ ⑤
2	製作において、対象者に合った工夫を考えることができた	① ② ③ ④ ⑤
3	対象者の反応が楽しみである	① ② ③ ④ ⑤

表9 事前と事後の平均値(A群)

	事前	事後	有意差	危険率
質問Iの1	4.39	4.25	無	—
質問Iの2	4.30	4.22	無	—
質問Iの3	3.92	3.89	無	—
質問Iの4	3.50	3.94	無	—
質問Iの5	2.86	3.47	無	—
質問Iの6	3.08	3.58	無	—
質問Iの7	2.53	3.44	**	1%
質問Iの8	2.75	3.47	**	5%
質問IIの1	3.28	4.06	**	1%
質問IIの2	2.81	3.94	**	1%
質問IIの3	2.83	3.94	**	1%
質問IIの4	3.03	3.97	**	1%

\*\*有意差あり

表10 事前と事後の平均値 (B群)

	事前	事後	有意差	危険率
質問Ⅰの1	4.13	4.18	無	—
質問Ⅰの2	4.18	4.11	無	—
質問Ⅰの3	3.90	4.00	無	—
質問Ⅰの5	2.87	3.50	**	5%
質問Ⅰの6	3.05	3.95	**	1%
質問Ⅰの7	2.55	3.63	**	1%
質問Ⅰの8	2.95	3.66	**	5%
質問Ⅱの1	3.47	4.21	**	1%
質問Ⅱの2	3.08	3.97	**	1%
質問Ⅱの3	2.97	4.00	**	1%
質問Ⅱの4	3.66	4.16	**	5%

\*\*有意差あり

表9, 表10より, 豊かな衣生活のための学習に対する意識と, 生活・社会・人・環境とのつながりへの意識に関して, Aグループでは, 大問Ⅰの7, 8と大問Ⅱにおいて有意な差がみられた。Bグループでは, 大問Ⅰの5~8と大問Ⅱにおいて有意な差がみられた。

表11 AグループとBグループの平均値

調査1

	Aグループ	Bグループ	有意差
質問Ⅰの1	4.18	4.25	無
質問Ⅰの2	4.10	4.22	無
質問Ⅰの3	4.00	3.89	無
質問Ⅰの4	3.58	3.94	無
質問Ⅰの5	3.50	3.47	無
質問Ⅰの6	3.95	3.58	無
質問Ⅰの7	3.63	3.44	無
質問Ⅰの8	3.66	3.37	無
質問Ⅱの1	4.21	4.06	無
質問Ⅱの2	3.97	3.94	無
質問Ⅱの3	4.00	3.94	無
質問Ⅱの4	4.16	4.00	無

調査2

	Aグループ	Bグループ	有意差
質問Ⅰの1	4.54	4.30	無
質問Ⅰの2	4.39	4.08	無
質問Ⅰの3	4.33	4.00	無

また, 表11より, 豊かな衣生活のための学習に対する意識と, 生活・社会・人・環境とのつながりへの意識, 製作に対する意欲や工夫に対する意識に関して, AグループとBのグループにおける事後を比較したが, 有意差は見られなかった。

## (2) 考察

### ①被服の選択や手入れの必要性について

調査1の大問Ⅰから, 事前と事後で有意差が見られなかったことから, 一連の授業がこの意識の向上に顕著に貢献したとはいえない。

### ②日本の衣文化への理解について

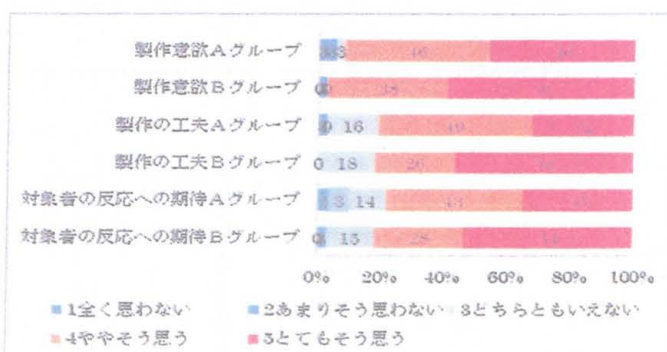
被服の文化に関しては, (5:とても思う)と(4:ややそう思う)を合わせた割合でみると, ABともに, 10~20%の増加が見られ, 授業の効果がうかがえた。また, 調査1の大問Ⅰから, Bグループの方に有意差が見られた項目が多く, これは, 日本以外の文化を学習内容に取り入れることで, 逆に日本を意識し, 理解度が高まった結果であろう。

### ④ 社会や人に関わる意識について

調査1の大問ⅡのESDに関わる内容についても, 事前と事後では有意差は見られたが, AとBのグループ間において有意差は見られなかった。グループ別に(5:とても思う)と(4:ややそう思う)を合わせた割合を見ると, 事後においては, どの項目でも飛躍的に伸びている。特に, 社会・人に関わる意識については, 50%近い伸びとなっているので, 布絵本を製作させた取り組みは, ESDに大変効果があると言えるであろう。

調査2の製作意欲に関する項目でも, AとBのグループ間に有意差は見られなかった。そして, どちらのグループにおいても, 図2に見られるように, 否定的な回答をした生徒が数%に留まっていた。

図2 製作に対する生徒の意識 (調査2)



今回のものづくりである「子どもたちに贈る布絵本製作」が、生徒たちにとって強制された学習活動ではなく、自ら考え、自ら創造する活動になっていたことが示されている。

以上のように今回の授業実践を検証した結果、製作の目標の設定時に、ものを作って完成させることを第一義にするのではなく、他者に贈るなどの活用を意識したもののづくりを目指すことによって、ESDの第2の観点である「他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、関わり、つながりを尊重できる個人を育むこと」が可能になると思われた。

## V. おわりに

今回の研究の発端となったのは、ESDとの出会いである。近年、家庭科の内容と密接にかかわる人の生活様式が、大きく変化している。それに伴い、これからの家庭科で何を教えていくべきなのか、家庭科の教科の存在意義がどこにあるのかと考えると、この教科自体が変化していかなければいけない時期にきている。それではどのような方向性を求めればよいのかと考えた時、ESDの実施における第2の観点、「他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、関わり、つながりを尊重できる個人を育む」という概念に、そのヒントを得ることができた。

今回の研究の中で行った布絵本の製作は、従来は「家族・家庭と子どもの成長」の領域の中での実習課題として行われており、「幼児と遊ぶおもちゃ作り」に関わる内容である。しかし、今回は、衣生活の領域と組み合わせる新たな授業展開の中に位置づけた。それにより、今回の研究で取り組んだおもちゃづくり（布絵本の製作）は、これまでとは全く違う展開になった。その大きな違いの一つは、布絵本を製作する生徒の意識である。2年生を対象としたため、子どもの成長の部分の学習はまだ行っていない。にもかかわらず、未来を担う子どもたちの大切さについて理解した上で製作に取り組んでいたことが、授業態度や作品からうかがえた。もう一つは、製作活動において、生徒はよりよい絵本の完成を目標にするのみならず、その向こうにある、それで遊ぶ子どもたちに何を伝えたいのかということに目を向けて活動していた点である。このことにより、今回の研究において目

指した、「相手を意識したものづくり」となった。そのため、子どもの成長を学んでもちやづくりをしてきた過去の3年生の作品を遙かに凌駕することにつながった。

家庭科のどの領域においても、ものづくりは重要な活動内容である。絵本製作だけでなく、「相手を意識し、活用させるものづくり」を設定することで、人との関わり、つながりを尊重できる個人を育む家庭科学習を実現できることが、本研から示唆された。

## 引用・参考文献

半澤亮・岩淵浩憲：技術・家庭科，日本家政学会誌 62 巻 3号

文部科学省：ESDとは，日本ユネスコ国内委員会

柴静子：染織の日本の発見を主題とした衣生活学習を支援する調査と内外資料の収集，広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第 62 巻 311-312，2013.

浦上千歳・柴静子：生活文化力を培う家庭科の授業づくり—伝統・文化の視点を取り入れた授業を通して—，広島大学附属東雲中学校研究紀要第 44 集 88-94，2012.

浦上千歳・柴静子：生活文化力を培う家庭科の授業づくり(2)—モン族の子どもたちに贈るジャパン・ブルーの絵本バッグの製作を通して—，広島大学附属東雲中学校研究紀要第 45 集 89-95，2013.

## 注脚

- 1) NHKBS スペシャル 「アジア染色紀行～針と糸の民・モン族の刺しゅう」 1996.6.13 放送を視聴させた
- 2) 特定非営利活動法人ブックスタート 『ブックスタート』第3版. 株式会社グループ現代. 2004 を視聴させた
- 3) 大阪成蹊大学芸術学部吉田晃良教授より提供いただいた写真である
- 4) 佐伯昭夫氏によって、昨年の生徒が製作した絵本がモン族の2つの保育園に届けられ、そこで園児に読み聞かせしていただいているビデオ映像及び写真である
- 5) 地球アゴラ「安井清子・モンの子どもへの絵本 2008. 11. 16 放送を視聴させた

## 謝辞

今回製作した生徒の作品は、佐伯昭夫氏によって現地の保育園に届けられる予定である。園児の様子なども撮

影をしてくれるとのことなので、帰国後になるが、生徒に映像を見せて、モン族の子どもたちが布絵本をどのように喜んで受け入れたのかを知ることができる。格別のご協力をいただき、深く感謝しております。

**The Development of lesson for Industrial Art and Homemaking to foster the global qualification  
through making a picture book made of cloths for children**

**Chitose URAGAMI and Shizuko SHIBA**

**Abstract.** This research aimed to make the effective lessons to connect between 'manufacturing' and 'understanding of developing countries' in order to practice ESD in the lessons of Industrial Art and Homemaking. So the lesson goal was set as making picture books made from cloths for children in Hmong who live in the culturally underprivileged area. Through the goal, the lessons were practiced for the purpose of fostering students who think much of relationship, which would lead to foster students' globalization. As a result of the questionnaires after the lessons for 8<sup>th</sup> graders, this practice contributed to foster students' minds of thinking much of relationship. Besides, the effective lessons could be made by establishing 'manufacturing for thinking about someone's feeling' through suggesting 2 lesson plans for ESD in Homemaking.

**Key words :** ESD, Hmong, global, connect, making picture books made from cloths